

高大連携による高校生の地域課題解決提案能力向上を目的とした

アンケート調査分析

1200401 乾 有志

高知工科大学経済・マネジメント学群

1. 概要

高大連携とは、平成 28 年施行された活動であり、高知県立山田高等学校と高知工科大学が提携し、高知県の抱える問題を高校生が解決案を思考し、提案するプロジェクトで「学校地域協働本部事業」と呼び、以下学校事業とする。

本稿では、高大連携において高校生が学校事業を通して、どのようなことに対して『地域』に魅力を感じ、また他者と協働して課題解決案を思考することにより、生徒自身にどのような影響を及ぼすかを分析検討したい。

調査方法は、筆者は 2017 年度の秋から学校事業に参加し、その際に一緒に活動をしていた人と山田高校の教員が協働してアンケートを作成し、そのアンケートを用いて『平成 30 年 3 月発行 山田高校学校地域共同本部 事業報告書』を作成している。そして本稿のアンケートを作成する際も、そのアンケートを参考にして作成をしたのち、2018 年度、3 年生にアンケート調査を実施した。

2. 背景

2-1 学校地域協働本部事業概要

そもそも学校事業とは『ここに住んでいる住民や企業の参画も得て、地域全体でここに住んでいる子どもたちの成長及び学びを支えつつ学校を中心とした地域発展を目指すことを目的とし、地域と学校がお互いを助けながら様々な活動を支援する事業』のことである。学校事業の取り組みは主に 4 つである。1 つ目は、山田高校学校地域協働本部の設置。2 つ目は、地域連携コーディネーターの設置。3 つ目は、華道・茶道・吹奏楽などの部活動支援員の配置。4 つ目は、放課後・土曜英語塾などの学習支援員の設置である。

そのことを踏まえたうえで、学校事業が掲げる目的は『地域の発展に思いを馳せ、地域創生に有為な人材を、地域と一体になって排出する学校をめざす』ことである。

またこの目的を通して、生徒に身につけさせたい力は主に

4 つである。1 つ目は主体的に地域イベントやボランティア等の地域貢献活動に参加し、運営することができる力。2 つ目は、地域の課題を発見し、その課題解決に向け全力で取り組むことができる力。3 つ目は、他者を思い、他者と協力して行動することができる力。4 つ目が自ら学び、自ら判断し、自ら行動できる力である。

2-2 学校地域協働本部事業の取り組み

学校地域協働本部事業の取り組みとして、高校生が行うことは主に 3 年間総合の時間を使い、課題探求学習をすることである。課題探求学習を通しての目標は『「チームでイノベーション」チームで協働して、地域課題にチャレンジする』であり、この目標をとおして、期待される効果は主に 3 つである。1 つ目は、地域活性化において当事者意識をもつことのできる。2 つ目は、地域課題解決にむけたアイデア（知識）が出てくる。3 つ目は、意欲をもって主体的に学ぶ生徒が増える。以上の 3 つである。

課題探求学習をする際、各学年で行う学習内容が違う。1 年次はチームで活動し、様々な企業と提携し、半年間を使い CM 作成を行います。そして、残りの半年間で、香美市、香南市、南国市に対して、政策提言を行うなどをすることにより、地域の情報を世界に向けて発信する方法などを学ぶ。同様に 2 年次もチームで活動を行う。1 年次で得た知識を踏まえて、高知県に対して政策提言を行うことにより、自分の将来を設計する方法を学ぶ。3 年次では個人で活動を行う。これまで得た知識や経験を踏まえて、自分の進路に関するテーマを設定し、深堀をしていく。これを行うことにより、自ら主体的に判断し、キャリア形成する力を育む。このような学習内容を通して、地域社会に貢献できる人材育成を育んでいく。



写真1 大学生による指導の様子

3. 研究目的

本研究では、山田高校での高大連携事業において、この学校事業を行うことにより、6観点の項目から生徒たちにどのような影響を与えているのかを明らかにする。また6観点について分析を行い、来年度以降の事業改善に役立てることを目指す。

4. 研究方法

4-1 研究の流れ

①学校事業を3年間参加し内容をすべてやり終え、2018年度に卒業した生徒計112名にアンケート分析を行う。

②学校事業が高校生に【取材編集力】、【協働性】、【プレゼン能力】、【主体性】、【地域へのかかわり】、【ためになったか】の6観点においてどのような影響を与えているのかをアンケートを用いて考察する。

③学校事業が高校生にどのような影響を与えているのかを提示し、今後より深く分析するために、改善点を示す。

4-2 アンケート作成流れ

1章でも少し説明はしたが、2017年度に実施したアンケート結果をもとに『平成30年3月発行 山田高校学校地域共同本部 事業報告書』を作成した。このアンケート作成に携わった人は当時この活動をしていた人と山田高校教員の方が協働してアンケートを作成した。そして本稿のアンケートを作成時にもこのアンケートを参考にして作成した。その際に山田高校校長にも本稿を作成する旨を伝え許可が出たため、本稿作成に至る。

4-3 アンケート項目

アンケートを作成する際に6つの観点を用意し、その観点をを用いて分析する。1つ目が【取材編集力】、2つ目が【協働性】、

3つ目が【プレゼン能力】、4つ目が【主体性】、5つ目が【地域とのかかわり】、6つ目が【ためになったか】である。

1つ目の【取材編集力】とは、現在起こっている様々な問題に対して自分から疑問を持ち、その疑問について考える力や授業以外の日常的な場面における出来事に対しても同様に疑問を抱きそのことについて考える力のことである。このことを踏まえて質問を3つ用意した。

2つ目の【協働性】とは、親しい友人だけでなく初めて会うような人とでも、同じ目的を持ってともに協働する力やチーム内である事柄について議論をし、足りないところを補い合う力のことである。このことを踏まえて質問を3つ用意した。

3つ目の【プレゼン能力】とは、単に自分たちの意見を発表するのではなく、自分たちの考えや思いを相手に伝え、理解してもらえるように工夫する力や、発表する際に堂々と自分たちの意見を話すことができる力である。このことを踏まえて質問を3つ用意した。

4つ目の【主体性】とは、チームの中でも率先して行動しそして自分で選択をする力や自分の将来のことを自分で考え自らの意志で決定する力である。このことを踏まえて質問を3つ用意した。

5つ目の【地域へのかかわり】とは、自分の住んでいる地域に関するニュースに関心を持つことや、将来地元に残って仕事をすることや地域にかかわりたいと考えることに関することである。このことを踏まえて質問を2つ用意した。

6つ目の【ためになったか】とは、3年間学校事業を通して、総合的に考えたときに自分のためになったと感じたことに関することである。このことを踏まえて質問を1つ用意した。

以上より質問内容は計15問である。

4-4 アンケート調査

学校事業を3年間受けてきた生徒がどのような影響を受けたのかについて分析した。

アンケートの項目は4件法で回答を求め、その項目は「1. そう思わない」から「4. そう思う」である。

実際のアンケート用紙では選択肢である、(そう思わない)を1点、(どちらかというと思わない)を2点、(どちらかというと思おう)を3点、(そう思う)を4点と設定し、以下の計算式で数値を算出し、集計を行い、出た数値を評価

ポイントとする。

(各項目の合計) / (回答者数)

また、評価ポイントが中間である、2.5 を下回ると「身についていない」、上回ると「身についた」、中間である 2.5 になると「どちらともいえない」とする。

5. 研究目的の設定

今回明らかにしたいことは「地域高大連携プロジェクトをやることによって生徒たちにどのような影響を与えるかを明らかにすること」である。

このような研究目的を設定したのは2つの理由がある。

1つ目の理由は大学生になってやることを高校生のうちにやることによって、いい影響を与えようと思ったからである。そもそも私は大学2年から本事業に携わっている。そこでコーディネーターとして、生徒と接していると、私が高校のころには経験できなかったたくさんのことをこの生徒は経験している。また私は大学生活を通して、他者と協働することの大切さや、人前で発表すること、その発表するための資料作りなどを、経験したことによって、私の価値観を刺激する要因の1つになった。だからこそ、先ほど述べたようなことを高校生が経験しているので、実際にどのような影響を生徒自身も感じているのかに興味を持ったからである。

2つ目の理由は高校事業の目的である、「地域創生に有為な人材を育成すること」に力を入れて取り組んでいるので、実際に生徒がどのように感じているのかを把握するためである。こちらが提供している内容に対して、生徒が実際に地元の高知県にどのような思いを馳せているのかを知ることが、今後の事業にも影響すると感じたからである。

以上の2点の理由から、今回このような研究目的を設定した。

6. 仮説の検証 (アンケート調査)

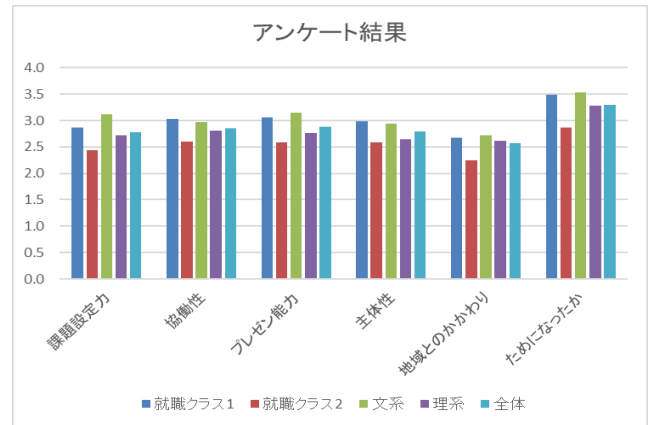


図1：クラスごとのアンケート回答平均

出所：筆者作成

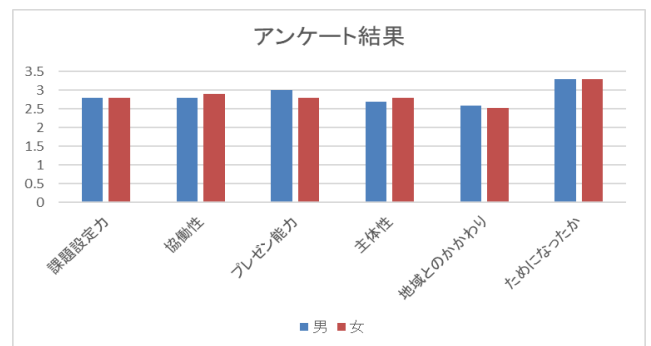


図2：男女の平均回答

出所：筆者作成

3年生の項目別クラスごとの回答(図1)および、男女ごとの回答(図2)に関するグラフから読み取れることを述べていく。

<課題設定力について>

図1より、理系と文系を比べたときにどの観点よりも一番差が開いている。(約4ポイント)就職2はこの観点においては身につけていないが、ほかの3クラスおよび、全体はすべて身につけている。

図2より、男女によっての変化はあまり見られないため、性別は影響を及ぼしにくい。

<協働性、プレゼン能力>

図1より、2つの観点は他の観点に比べて平均的に高いため、本事業を通して一番成長がみられる。(最低が2.6ポイント、最高が協働性3.0ポイント、プレゼン能力が3.1ポイント、平均が2.9ポイント)すべての項目において身につけている。

図2より、協働性の観点では女性は少し高く、プレゼン能力は男性が少し高いので、企画等を作成する際は女性が積極

的に取り組み、発表は男性が積極的に取り組んでいる傾向がある。

<主体性>

図1より、就職クラス2と理系クラスの回答平均に対しての差があまりない。

図2より、協働性と同様に女性のほうが少し高いため、グループワークに関する項目は高い傾向がある。

<地域とのかかわり>

図1より、どの観点よりも低い。(最低が2.3ポイント、最高が2.7ポイント、平均が2.6ポイント)特に就職クラス2が著しく低い。

図2より男女の平均回答においてもどの観点よりも低い。また男女での差はあまりない。

<ためになったか>

図1より、すべての観点到比べて一番ポイントが高い。(最低が2.9ポイント、最高が3.5ポイント、平均が3.3ポイント)

図2より、男女ともに高く、関わる観点は違うが、平均すると一定の満足を得ている。

7. 検証を踏まえての考察

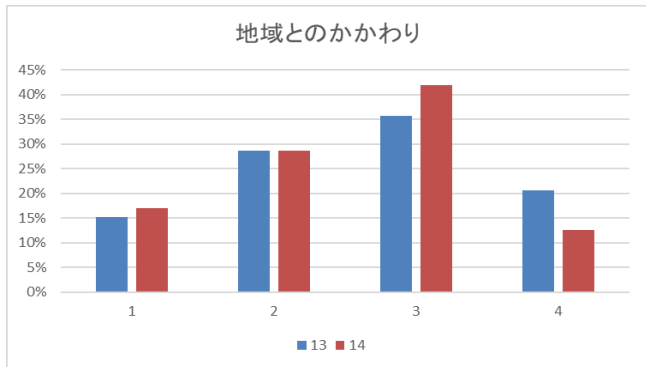


図3：【地域とのかかわり】の評価別割合

出所：筆者作成

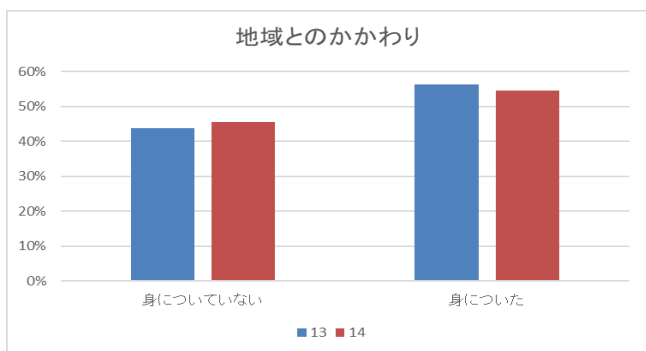


図4：【地域とのかかわり】の能力取得割合

出所：筆者作成

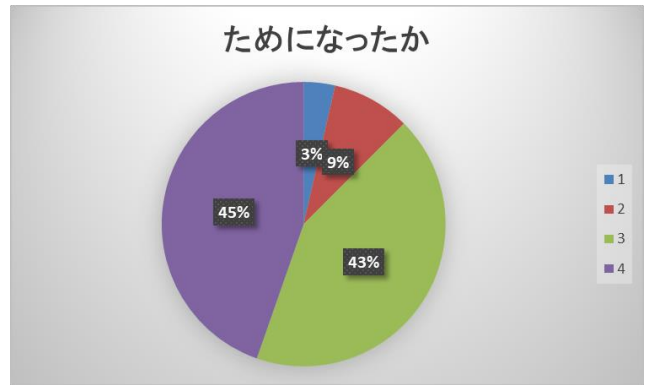


図5【ためになったか】の評価別割合

出所：筆者作成

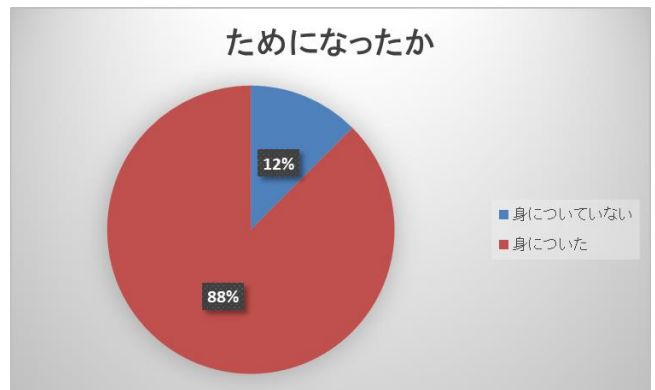


図6：【ためになったか】の能力取得割合

出所：筆者作成

【地域とのかかわり】に関する項目がほかの項目に比べてとても低いため、学校事業が掲げる目的の一部である、『地域の発展に思いを馳せ』という部分に関して、目的達成をしたか疑問が残る。実際、図3を参照してみると、問13、14に関しては（どちらかというと思う）が一番多いが、図4を参照してみると、「身についた」と感じている生徒は問13、14ともに約5割しかいなく、実際に学校事業を通して、身についたとはいえないことがわかる。

【ためになったか】に関する項目はほかの項目に比べてとても高いため、学校事業を通して多数の生徒は3年間を通して自分のためになったと感じている。実際図5を参照してみると、（そう思う）と思う生徒が一番多くまた、図6を参照してみると、約9割の生徒が「身についた」と感じているため、3年間を通して自分のためになったといえることがわかる。

図1を参照してみると就職クラス1と就職クラス2を比較

したとき、全体的に就職クラス1のほうは評価が高い傾向がある。しかし、クラス分けをする際はランダムに振り分けられているので学力に関する差はあまりないはずである。したがって考えられる可能性は、担当教員の指導の仕方、発言やふるまい等何か別の要因も影響している可能性が示唆できることがわかる。同様に理系クラスと文系クラスを比較したとき、全体的に文系クラスのほうは評価が高い傾向がある。このことも現段階ではまだ要因がわからなく、理系クラスが低いのか、文系クラスが高いのか、または学習している内容によって6つの観点に影響を及ぼしているのか等の様々な要因を示唆できることがわかる。

表1を参照すると、男女どちらも観点別の平均が中間である2.5ポイント以上なのでほとんどの観点において「身についた」と示す事は出来る。しかしながら表2、表3を参照し男女別選択肢回答率を見てみると、ほとんどの観点において答えられている選択肢は（どちらかというと思う）という答えであり、【地域とのかわり】という観点においては（どちらかというと思わない）とほとんど同数であることがわかる。だが【ためになったか】という観点を見てみると（そう思う）と感じている生徒が約5割いる。このことから推察されることは、3年間やってみて何かしらの達成感や経験等を得ることができた生徒が約5割いるが、何に対して達成感や経験等を得たかは生徒自身がわかっていないことがわかる。だからあいまいな選択肢である（どちらかというと思わない）、（どちらかというと思う）を答える生徒が多くなる傾向が見える。

図2を参照すると、男性はプレゼン能力に関する能力が女性に比べると高いため、聴衆のまえで発表することに関する能力が成長したと感じていることがわかる。同様に女性は協働性・主体性に関する能力が男性に比べると高いため、グループワークをする上で必要になってくる能力が成長したと感じていることがわかる。このことから、男性・女性それぞれに身に付けやすい能力が存在することが示唆できる。グループワーク等を行うときは男女の人数比率を均等にすることにより、お互いが良い影響を与えながら企画作成を行うことができる。

	男平均	女平均
【課題設定力】	2.8	2.7
【協働性】	2.8	2.9
【プレゼン能力】	2.9	2.9
【主体性】	2.8	2.8
【地域との関わり】	2.6	2.5
【ためになったか】	3.2	3.3

表1：男女の観点別平均

出所：筆者作成

	男合計			
	1	2	3	4
【課題設定力】	8%	22%	46%	24%
【協働性】	12%	17%	47%	24%
【プレゼン能力】	5%	22%	47%	26%
【主体性】	8%	24%	52%	16%
【地域との関わり】	15%	32%	33%	20%
【ためになったか】	6%	8%	38%	48%

表2：男性の観点別回答割合

出所：筆者作成

	女合計			
	1	2	3	4
【課題設定力】	11%	26%	43%	20%
【協働性】	6%	20%	54%	20%
【プレゼン能力】	4%	25%	53%	19%
【主体性】	6%	27%	47%	20%
【地域との関わり】	19%	26%	40%	15%
【ためになったか】	2%	10%	44%	44%

表3：女性の観点別回答割合

出所：筆者作成

8. 小括（今回の調査をふまえて来年度に向けて）

今回明らかにしたかった内容は、6観点の項目から生徒たちにどのような影響を与えているのか、であったが初めて行ったアンケートとはいえ、まだ断言して明らかになったといえる内容はないがいくつか可能性を示唆できる分析を行うことができた。このアンケートは2018年度卒業生に実施したため、2019年度卒業生にもアンケートを実施すべきだったが、私の諸事業によりアンケート実施ができなくなったので2020年以降に実施する場合に参考したい。

それでは生徒たちに与えた影響について述べていきたい。1年次にはCM作成・市長提言、2年次には県庁提言、3年次には個人テーマを深堀という段階を踏まえることによって、生徒たちはある課題に対して論理的な思考を用いて解決するプ

ランをチームで考え、チームで協働してパワーポイント・ワードや動画等を作成し、人前で自分たちが考えたプランを発表するといったことを経験した。こういったことを経験することにより、一定数の生徒は6つの観点について身についたと感じている。さらには男女によって身につけやすい観点がある可能性も示唆することができた。協働性・主体性といったチームワークを行う上で必要な能力は女性のほうが身につけやすく、プレゼン能力といった人前で話す能力は男性のほうが身につけやすい。これから先、様々な企画を考えて実行していくと思うがその際は、同性同士のグループで企画作成するよりも、異性が混在するグループを結成し企画作成する方が、お互いの欠点を補い長所を活かすことができる。

またアンケート分析を行うことにより、アンケートを作成する前には見えなかった反省点や改善点を見つけることができたのでいくつか述べていきたい。クラスという属性によって身につけやすい能力があること、性別によっても身につけやすい能力があること、教師の指導方法によって影響することなど様々な要因があることが分かった。またこの要因を分析するために、記述欄を設けて実際に生徒がどのように考えているか・どのように感じているかを書いてもらい分析することや、教師側にも学校事業に関する指導アンケートを実施し、教師もどのように変化し・どのように感じているかも同様に分析していくことが必要になってくる。生徒が属しているクラスによっても、受ける影響が違ってくる可能性もアンケートを通して分かったので、クラスごとの学習内容や取組等も調べていく必要がある。

これからの時代は常に変化が必要であり、人口減少・少子高齢化・グローバル化・society5.0などたくさんのが起こると想定される。このことは社会だけではなく、高校にも影響を及ぼす可能性が十分にある。このことをきっかけに山田高校も変化し「探求」に対して重きを置き、新たな学科を設置する。グローバル探求科・ビジネス探求科・普通科の3本柱になり、今後運営される。「主体性」「考える力」を育成し、自ら課題に挑戦していく主体的行動力を身につける視点・視野・視座を身につけ、論理的思考・批判的思考・創造的思考そして表現力を身につけて将来「既存の発想にとらわれず、チャレンジ精神を持ち、新しい価値を社会に想像することができる人物育成」を目的とし今後も成長し高知県を担

う学校になっていくことが予想できる。

そのためにも今回のアンケート分析を通して、分かったこと・示唆できること・反省点・改善点などを踏まえて、高知県の地域活性化に役立つような文献にしていきたい。

謝辞

本稿の作成に当たり、多くの方にご協力いただきました。高知県立山田高等学校の前校長浜田様及び正木校長には、文献[2]の報告書公表以降にこれを踏まえた筆者独自のアンケート調査を認めていただき、また本稿作成において記載してある全データの使用を許可いただきました。記して感謝の意を示します。

参考文献

[1]第3期 高知県産業振興計画

<https://sanshin.pref.kochi.lg.jp/keikaku/>

[2]平成30年3月発行 山田高校学校地域共同本部 事業報告書